



はき出させる教育

三 木 安 正

教育というのと、とかく「つめ込む」という働きが——意識すると否にかゝらず、あるいはまた、それをあたかもそうしないかのように粧って——つきまといているように思えるのだが、わたくしは、近ごろ、教育という働きは、むしろ、人間の心の中のものを「はき出させる」ことに重要な意義があるのではないかと、強く感じてゐる。

それは、あたかも、よこれた水をかい出すと、そのあとに清水がわきだしてきて井戸を満たす「井戸がえ」のような働きで、われわれには、かい出した後にわき出てくる水の量とか質とかについて、自由にコントロールしたり、以前のものとは全然変化させてしまふというような力はないが、古い水をよどましておいたのでは、新鮮な水がたえられているというわけには行かない。教育の働きとは、常に新鮮な水がわき出しているような状況を作ること、こちらの思い通りに、水をつぎこむことのように考えるのは、思い過ぎではないかと思う。井戸がえのあとですっかり変つた水が出てきたように見えることがあつても、それは、前の水に何かまざるものが

あつたのであろう。

以上のような結論的なものを導き出してくれたものは、わたくしの幼児教育と精神薄弱児教育との経験からであるが、そうした眼で小学校以上の教育のことを考えてみると、やはり、基本的なものの考え方では誤りないのではないかと思う。幼児教育と特殊教育とは教育史上、教育の基本的な考え方や教育の方法に、それこそ「泉」となつてきたのであるが、今はどうであろうか。

× × × × × × × × × ×

学習活動とか学習意欲とかが起きてくるためには、まず、彼自身の所屬する集団の中で、自らの座を占めることが出来、彼の能力に比して適当な課題が与えられているということが必要であるが、そのためには、彼の能力が十分發揮され、それが正當に認められていなければならぬ。それはただ、他人からそう認められているといふだけでなく、自分自身でも、そういう状態にあると感ずれば、いわゆる安定感を得るのであり、その上に立って探究心が起つてくる

のである。

そういう状態におかれるのは、子供の心身の発達に即応して、次第に獲得されてくる力が、いつも充分に發揮できるように、環境が整えられている場合であって、幼稚園教育の必要性は、子供たちの心の中に芽生えてきた社会性を育成するための場をしつらえるというところにあると考えてよい。一人子で家庭で甘やかされ過ぎていたために幼稚園の生活になじんで行けないものは、幼稚園の生活に安定感をもち得ないので、遊びへの意欲、製作への欲求というものが出てこない。家庭で甘やかされ過ぎていたことが、彼の力を十分に發揮する機会を与えなかったという結果になり、他人と交らねばならなくなった際に、その中にふみ出して行く勇気を失わしめたわけである。

つまり、よんだ水におおわれていて、新しい力が湧き出してくるのをさまたげていたのである。

幼稚園は、そうした引込み思案の子、自信を失った子を矯正して幼児なみに人と交われる子にといった実績を数多くもっているが、それは、何らかの方法で、抑圧的に働いていた力をとり除き、集団の中で自分の座を占める手がかかりと自信を与えて、そういう効果をもたらすわけである。

ある子の場合には、絵をかかすことを通じて、自分も他の子と同じような表現力をもっているのだという自信をもたせて行く。また他の子の場合には、何となく異なった世界に住むものと思われていたようなものが、自分と同じ世界にすむ仲間であるということの自覚にいたらしめて、自分がその世界の一員になってしまふ。

つまり、自分の世界と他人の世界との落差がなくなつたわけである。

サイフォンというものがある。何ほどの落差をもつた二つの器の中に入った水を、管で導くようにすると、落差がゼロのところをいたって水は安定する。

それぞれの器に入っている水が、各々別個に孤立しておかれていたのでは何の交渉もおこり得ないが、その間に各々疎通させるものがあり、各々の力がはき出されて、あるいは、他のものがはき出したものを受け入れるものもあって相互の交渉の地盤が固まる。

つまり、個人的な成長発達の面においても、社会生活への適応という面においても、もっている力をはき出させ、新しい力をわき出させることが必要になってくる。

× × ×
絵の指導についてみても、わたくしどもが幼稚園に通っていたころは、二〇センチ×一〇センチぐらいの画用紙に色鉛筆で、形の整った細かい絵を、きれいに画くことが上手とされていたが、色鉛筆がクレオンとなり、さらにもっとやわらかなクレパスが使用されるようになる。画用紙も次第に大版のものがよるこばれるようになり、昨今では、大きな模造紙などに水彩具（それも不透明絵具）で思いきり、感じをぶちまけることが、進歩的なものとされてきたが、さらに、絵具でも筆を用いて描くことは、筆の使用という技術的な制約をうけるので、筆もやめてしまつて、指で描くということが最も新しい方法とされてきた。これは、要するに絵を描くということとは、心の中に感じとつたものを、あるいは、心の中にたまつ

た経験と紙と絵具という媒介物によって、外部にはき出させることが基本的な仍となるのであるということになってきたからで、絵とは、こういうような形を上手に描くのだという、型にはめる練習方式から、逆に、形や技巧にとらわれず、心の中のものを外界にはき出させるのだという考え方に變つてきたのである。

このような指導理念と、あたかも平行するように、絵は臨床心理学的診断の道具とされるようになり、絵を通じて、人の心の内奥の状態を察知しようとするプロジェクトブ・テストといわれるものが考案されるようになり、さらに、一歩進んで、描画ということが精神治療法の手段とされるようになってきた。

(近頃、絵を見て病気の診断をするというような人も現われてきたが、これはどうも、行き過ぎではないだろうか。医学が多年の研究をつんできたものを、そして、それを活用する医者は多年の修練を要するものを、ちよつとやそつとの経験で、絵をみて病気の診断をするというのは言語道断のことだ)

こうしたことの意味を、行き過ぎをいまいじめながら、よく味わつて見ることは重要な仕事である。

振付遊戯が律動運動に進化してきたこと、音楽や工作の指導方針の変化などにも、上述のことと相通する流れがみられよう。

つまり、つめこむことからはき出させることへとという流れがみられるのである。

x x x

「しつけ」といわれる方面でも、かつての「しつけ」は大人が定めた行動の規範を子供におしつけて守らせ、習慣化させるものと考

えられていた。鑄型にはめこむ教育である。しかし、そうした「しつけ」では、多くのゆがみをもった人物が出来たり、また自主性、自律性に欠けた人物があらわれたりする。教育はすべからず、対象となるものの成長発達に則したものでなければならぬとされてきたことは、もはや一般の常識である。

そこで、今、われわれの考えている「しつけ」とは、要するに、子供がその成長発達によって示してくる力を、正しく発揮させるということにある。一人で立つて歩きたくなれば、歩くことを邪魔しないように、運動の自由な衣服をきせ、背中にくりつけておくようなことをせず、運動の機会を与えるのであり、食事にしても、自分で食べようとする意欲を示せば、まずスプーンを与えて自ら食べられるようにしてやり、一方泣いたからといって、すぐ食物を与えるというようなことをせず、正しい健康的な要求を育てるような規律を考えて行く。

子供が三才ぐらいになると、いろいろといたことをきかなくなりこれを反抗などといっているが、子供の反抗とは要するに、次第に獲得されてきた力を試めしてみようとする意図の発露であると、わたくしは見る。

反抗というような名でよぶ前に、どれだけ彼等の力を発揮させてやる機会を与えたかということが、自ら問われなければならない。

単に反抗は望ましからぬ行動であるから、抑制しなければならぬと考えれば、本当に反抗心を養うことになったり、畏縮させることになったりする。いわゆる、不適応行動というものを反社会的とか非社会的とかに分けるが、そうしたものが生ずるのは、この時期の

取扱い（広く環境の力といった方がよいかもしれない）に多くの関連があるのではないかと思う。

次第に獲得して行く力を發揮させるということは、わき出して行く水を使うということである。

そして、四、五才にもなって切実に友達を求めようになつた場合には、水位を同じようにして、自他の間に水が疎通するようにしてやる必要がある。幼稚園が小学校の前段階として、小学校とは別の学校組織として独自の存在を認められるとすれば、そうした水位を比較的安定に保てるようにするところにあるともいい得よう。そうして、自己の力、心の中なるものを十分はき出させることの出来る状態にすることによって、子供たちは安定感をもち、幼稚園生活を充実することが出来る。

そうした集団生活を充実することが、さらに次の力を養わせることになり、社会一般の人々が、教育というものに期待する。読み書き算数のごときものの基礎も、ここにありと思う。

× × ×

人間が文字を發明し、数を使用することになつたのは、結局、集団生活をなすことによつて対人的交渉が必要になつてきたからであるが、読み書き算数などを教えることが、極めて困難な重症の精神薄弱児などでは、集団生活の一員となり、ある程度複雑な対人的交渉をもつというものは出来ないものが多い。そうした交渉が成立しなければ、読み書き算数などは必要がないのであるから、これを学習せしめることは極めて困難となるのは当然であろう。たとえ、反復練習によつて、機械的に学習させても、それは活用することの出

来ない無意味な記憶にとどまってしまう。

それ故、精神薄弱児の教育では、読み書き以前の教育としても、また、その本来の教育目標がある生活教育の方法としても、対人関係を豊富にして行くための集団生活教育ということが重要な部分を占めることになるのである。

人間の社会生活では、ここでは各人の意図が協調できて行かなければならないのであるから、何らかのルールを設けなければならぬ。交通規則といったものから、国民道徳といったものまで、要するにルールがいろいろあるのである。ジャンケンをして勝ち負けが分らなければ、順番にするということもさせるのもむずかしい。勝ち負けとか順番とかいうことは、自他の区別が出来た上で、自己の欲求を抑制する力が出てこなければならぬし、さらに進めば自分を客観化してみるということが必要になってくる。集団の中で自分はどういう位置を占め得るかということがわからなければ、集団の一員となることはできない。

それではこうしたことが、どんな事実を通してみることが出来るかということを考えてみると、それは、その集団の中で、どの位そのものの力をはき出しているかということによってみることも出来る。

集団の中であつて、そのものの力をはき出すことが出来れば出来るだけ、そのものは集団の一員としてしっかりした席を占めているのだと見ることが出来る。

自己中心性の強い幼児期の子供を教育する幼稚園や、自他の分化が不十分であり、社会性が薄弱である精神薄弱児の教育においては

集團生活を形成し、その中で、彼等の心の中のものをはき出させ、それによって、集團生活をさらに充実して行くという、教育が根本的なものにならなければならないと思う。

X X X

心の中のものをはき出させた後に、何がわき出して行くかは、われわれの力をもってしてはコントロール出来ないというようなことを前に書いたが、といって、われわれは、ただ井戸の中の水を無闇にかい出しているのではない。井戸がえのたとえでは、工合が悪いが、実は、もっとこの方面のことがわき出してきてほしいと願いが、それ相應の部分の水をかき出して行っているわけである。

けれども、われわれの願いがいつも達せられるというわけには行かない。それは水のかい出し方が悪い場合もあろうし、またいくら要所をついていても、後から出てくる水が悪いという場合もあろう。

そうした意味では、教育は甚だ無力である。また現在の社会が、教育に対して、その機能を十分に發揮せしめるように、多くの資本を投じてよいポンプを具えさせているということは到底できない。実は「さる井戸が之をしていようなものかも知れないのである。

われわれは、こうした教育の現状をよく認識すると共に、教育の力の限界ということも常に念頭においておく必要があると思う。

教育者は子供をよくする役割をになうものであるが、何でもよくすることは無論できるものではない。力の限界を考えると、一方からいえば、十分に力を尽しているかどうかということも反省することともなるのであって、その意味から、果して今日の幼稚園の教育が良心的に研究されているかどうかは十分に批判されるべきであろう。ところによっては、泉の中に汚物を投げ込むようなことをしているところがあるかも知れないのである。(東大助教)

(21頁より続く)

上に述べて来た社会施設の機能の不足を指摘したものと考えられその意味で注目されるべきである。わが国幼稚園の社会教育的活動が十分になされなかつたという事は、わが国社会の家族的特質による

とも、或いはわが国に保育学校運動の展開をみなかつた事によるとも、或いは保母の教養や待遇によるともされるであろうが、所詮はわが国幼稚園の伝統にまつわるものにはかならないと言えるだろう。

第五表

保 育 所		年 度	幼 稚 園	
施設数	幼児数		施設数	幼児数
2353	216827	昭和24年	1786	227761
2871	249166	25年	2100	224251
4141	355158	26年	2455	244423

められた事は、幼稚園の発達のために喜ぶべき事ではあるが、公教育の立場からするならば、未だ問題が多くこのこざれているところを一言しておきたい。その事例は上に述べて来たところによって理解されると思う。

(名古屋大学教授)